

令和5年(2023年)秋における外来魚稚魚生息状況調査結果

山本充孝・石崎大介・孝橋賢一

1. 目的

2023年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル：以下、バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

2023年10月3日から11月9日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深7m以浅）において、これまでの110定点から56定点（北湖36定点、南湖20定点）に減らして調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長4m）を小型動力船で湖底を曳きまわすことで実施した。曳網速度は0.27m/秒を基準とし、北湖では5分間、南湖では3分間曳網した。採捕魚の体長組成から、バスでは標準体長110mm未満（北湖）、90mm未満（南湖）、ギルでは標準体長80mm未満を当歳魚として、その生息密度（曳網面積1haあたりの採捕尾数）を算出して、2007年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では過去2番目の高水準であった2021年から大幅に減少した{72尾/ha（前年比23.0%）}（図1）。一方、南湖では昨年から増加した{1,262尾/ha（前年比173%）}。

ギル当歳魚の生息密度は北湖では前年比44%の365尾/haと減少したが、南湖では過去最低水準であった昨年からは増加し、259尾/ha（前年比132%）であったものの、2016年以降では低水準が維持されている（図2）。

近年、バス当歳魚の生息状況が高水準になることがあり、生息量がギルと同程度または上回る傾向がみられている。¹⁾ 今後、いかにバスの生息量を抑制するか、当歳魚の発生状況にも注目しながら検討する必要がある。

引用文献1) 本報告中の「令和5年度（2023年度）当初の琵琶湖における外来魚生息量の推定」を参照。

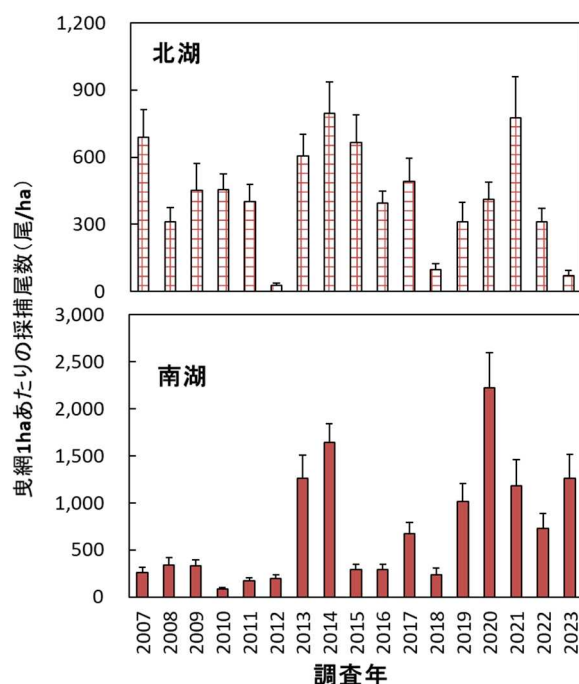


図1 曳網1haあたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

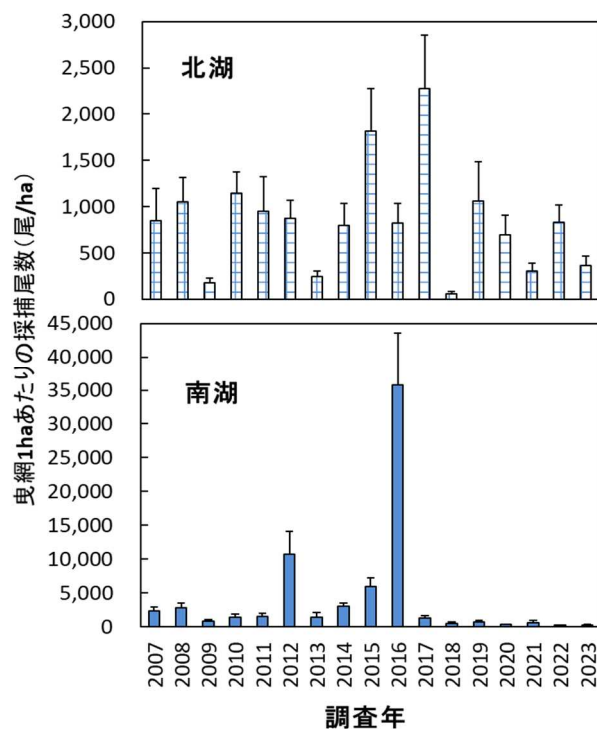


図2 曳網1haあたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）